



“子どもたち”の 声をきく

～東日本大震災からこれまで、そしてこれから～

東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室 “S-チル”



はじめに

2011年3月11日、東日本大震災という未曾有の大災害に見舞われた子どもたちは、その後、どんな日々を送っていたのでしょうか。こころの痛みや不安を示す子どもたちもいました。淡々と日常を送る子どもたちもいました。様々な活動に参加したり、他者の世話や手助けをする姿もみられました。大人は、どう声がけをすればよいかわからなかったり、「頑張り過ぎてはいないか?」「周囲を気遣って我慢しているのではないか?」と思ったりしました。子どもに元気がなければ心配で、元気でも心配…。震災を経験した子どもたちをとりまく大人たちは、そんな“気がかり”をもちながら、子どもに寄り添ってきたのではないかと思います。

ひと口に子どもといっても、年齢によってその姿は大きく異なります。年少の子どもにとって、自分自身に起こっていることを語るということは、決して簡単なことではありません。自分や家族に何が起こっているのかを事実として理解することも難しく、事実と感情を整理して話すことはさらに難しいでしょう。大人に伝えるための言葉も未だ十分には持ち合わせないかもしれません。これに対して青年期になると、自分や他者、社会の出来事、現在につながる過去、現在からつながる未来にも目を向けるようになります。繊細な心の動き、他者の視点に立った共感や思いやり、出来事のつながり、人生の流れや大事な人に向けた思いなど、目に見えることだけではなく、目に見えない多くのことを含めて自分の心の中で考えます。その中で、次第に自分の言葉をつみつけていきます。ただ一方で、年齢を重ねることは、現実としての喪失に向き合わなければならないことでもあります。周囲の反応や事情、思いにも配慮が及ぶからこそ、自ら“話さない”ということを選ぶことも不思議ではありません。

2015年と2016年、震災子ども支援室は、震災で親を亡くした子どもたちの進学を支えるみちのく未来基金のご協力を得て、みちのく生(奨学生)のお話をうかがう座談会を行いました。震災から時間が経つ中での支援をどう考えていけばよいのか、支援室としては、当事者の方々にどんな小さなことでも教えていただきたいという思



いだったのです。座談会は4回行われ、青年期(大学生、専門学校生等)となった“子どもたち”が、震災後の戸惑い、迷い、疑問、そして復興とは、支援とは、などについて、ご自分の言葉で率直に語って下さいました。この時、頂いた言葉の数々は、以後の震災子ども支援室にとっての指針であり財産となりました。

そして今回、震災から10年目となる2020年の秋、あらためて、震災で親を亡くした、当時の“子どもたち”のお話をうかがうことができました。新型コロナウイルス禍の中、オンラインのインタビューや自由記述の形で応えてくださった3名の方々の声です。震災当時は中高生だった方々の10年後のありのままの言葉を、許可を得て皆様にもお伝えします。

震災と震災後の体験やそれに対する思いは、簡単にまとめあげることはできない個々のものだと思います。また、人生に起こった大きな出来事を考えるとき、“子どもたち”がその時何歳だったのかということも大事な点です。例えば、高校生のその後の10年間で、小学生のその後の10年間は、随分違ったものになるかもしれません。ですから、3名の方々の言葉は、震災を体験した他の子どもたちの“代表”というわけではありません。しかし、震災当時の“子どもたち”が、それぞれの思いを抱きながら、決して容易だったわけではない時間の流れの中で、確かに成長してきた10年後の姿には、他の多くの“子どもたち”の姿と重なる部分もあるだろうと思います。

当時の“子どもたち”の言葉が、身近で“子どもたち”を育ててきた(今も育てている)方々や、遠くから“子どもたち”を気遣っている方々だけでなく、彼らが気持ちを寄せるこれからの子どもたちにも、いつか届くことがあれば何よりです。

2020年12月

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室長

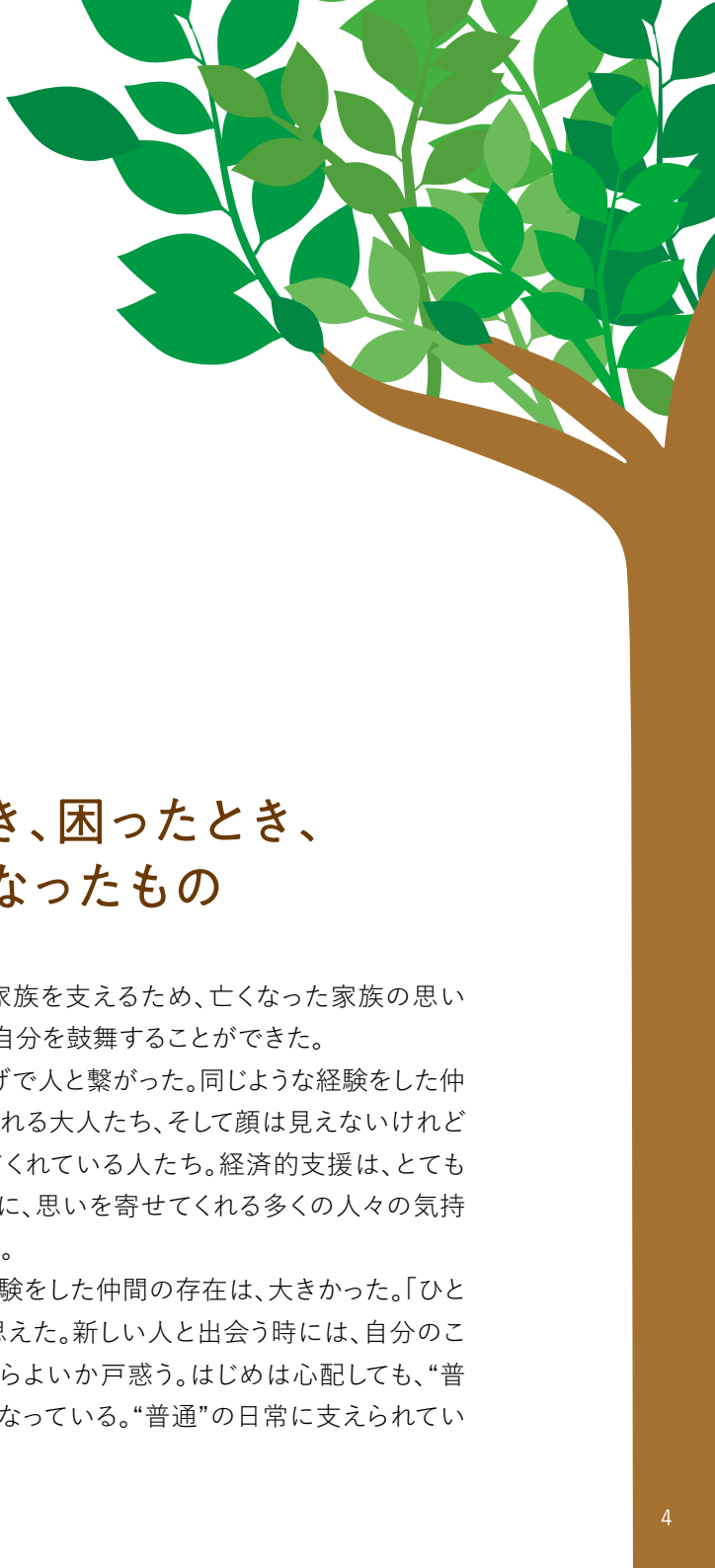
加藤 道代

*このインタビューは、東北大学大学院教育学研究科研究倫理委員会より承認を得て実施されました(承認番号20-1-022)



目 次

1 辛いとき、困ったとき、支えになったもの	4
家族の存在	5
支援団体、支援の手	5
友だち、仲間	6
2 地元への思い、地元の变化・復興	8
地元への思い	9
地元の变化・復興	9
3 この10年間	11
変わらないこと	12
変わったこと	13
4 子どもたちに伝えたいこと	15
普段から伝えたいことを言葉にする	16
ひとりで抱え込まないで	16
夢や希望をもって	17
5 これからのこと	18
震災を活かす(故人を生かす、自分を生かす) ...	19
誰かのために	19



1

辛いとき、困ったとき、 支えになったもの

一緒にいる家族を支えるため、亡くなった家族の思いに応えるため、自分を鼓舞することができた。

支援のおかげで人と繋がった。同じような経験をした仲間や見守ってくれる大人たち、そして顔は見えないけれども支援を支えてくれている人たち。経済的支援は、とても役立った。同時に、思いを寄せてくれる多くの人々の気持ちに支えられた。

同じような経験をした仲間の存在は、大きかった。「ひとりじゃない」と思えた。新しい人と出会う時には、自分のことをどう伝えたらよいか戸惑う。はじめは心配しても、“普通”の友だちになっている。“普通”の日常に支えられていくこともあった。

家族の存在

震災で父親を亡くしてるっていうこともあって、(辛いときや苦しいときに)思い浮かぶのはやっぱり家族のことだった。家族のことを考えて、「ここで折れちゃいけない」っていうふうに自分を鼓舞してやってきた。

.....

確かに父親亡くしたってことは、ホントに悲しくて辛いし、今も「もし、いたらなあ…」ということは考えたりする。だけど、それよりももっと明るい、もっと楽しいことを考えて、日々過ごした方が絶対にいいし、家族としても、父親もその方が喜ぶだろうなあということを考えているうちに、人間関係をどうにか切り抜けられた。

支援団体、支援の手

実際、支援団体に行ってみると、いろんな状況の人がいて、自分がクヨクヨしちゃいけないみたいな。そういう意味では、支援団体とのつながりは、父親のことを考えるひとつのきっかけになった。

.....

同年代ではない大人の方々に支えてもらうことがあったのが心強かった。

.....

大学入学に関して経済的にちょっと心配があった。働いていた父親が亡くなって、母親ひとりで支えているっていうのが、さすがに中学生でも分かるというか。非常に大変だなということは分かっていたので、「大学に行きたい」っていう思いもあれば、一方で、大学は経済的なことも考えないといけない。そういう面で悩んでいた時期があった。これについてはいろんな大人の人たちが支援してくれて、かつ母親が「支援をしてくれる人がいるっていうのは、ホントにないことなんだから、せっかくだから行きなさい」って後押ししてくれて、切り抜けられた。

正直、高校のときは、母親とお姉ちゃんがめちゃくちゃ支援を調べてて、そのふたりに言われて。自分は受け身といいますか。(大学入って)さすがにこのまま頼りっぱなしっていうのもダメだし。自然と自分で調べようかなというふうに。

大学入ってから自分でいろいろ支援制度とか、自分の手で何とかしようっていうのを考えて、まあ、いろいろ調べたら、意外とあるんだなっていうのが分かった。

自分たちを支えてくれてる人がいるっていうのを、今になってすごいありがたい存在だと強く感じている。

たぶんこの震災で、個人的に震災で1番傷ついたところって言うんですかね、受けた被害って言うんですかね、そういう意味では、精神的な部分が大きいので、被災地外からの応援とか、応援の言葉だけでも非常にありがたいし、非常に感謝です。

友だち、仲間

自分と同じように被災した友達と当時のことを話し、「あのときは大変だったね」とお互いに励まし合った。

同じ境遇の人たちと時間を共にして過ごすことによって、「自分ひとりじゃない」って思えた。

「あー、自分だけじゃないんだな、こういう境遇」っていうふうに感じる事ができてから、『(父は)ほんとにいなくなった』って認識してもいいんだな』って思うようになった。

被災していなくても、「この人になら打ち明けてもいい」と心を許した友達に話を聞いてもらうこともあった。

悩んだ、困った時期は、震災当時(中3)から高校に入学したときと、高校卒業から大学に入学するとき。

高校入学のときは、父親亡くして元気がないっていうか、喪失感とかあった状況で、どうやって学校生活していくか、友達をどうやってつくればいいのかとか、人との関係で困った。「もし父親のこと聞かれたら、どうしよう」、「話そうか」、「話した方がいいのかな」とか、「嘘ついた方がいいのかな」とか、高1の春、秋には悩んでいた。ただ、実際には周りの友達は本当にそういうの気にしない。そういうことを一応聞いてきたけど、話題に出さなくて、学校生活とかゲームとか友達同士で話すような内容ばかりだったんで。そういう意味では切り抜けたというよりかは、環境が問題なくて何とかいけたっていうか…。やっぱりそういう周りの人たちがいろいろと楽しくやっていると、意外と切り抜けられる。何かそういうの考えてた自分っていうのがどんどん吹っ切れてくる。

友だちは「何となく雰囲気は察していたんだろうなあ」ぐらいに思う。たぶん友達は知ってたけど、あんまり触れないようにしてくれていた。

いろんな人と、クラスの人たちと普通に友達となっていくうちに、まあ、わざわざそんなの気にする人、いないんだなっていうのをだんだんと…。というかまあ、触れたところで、たぶん言ったところで、わざわざ傷をつついてくる、そうするような人はいないんだろうなと。何となく心がそういうふうになっていった。

(大学では)まあ、聞かれたらしゃべるって感じで。言っても、「おお、そうか」みたいな、まあ、スルーってしてくれるって言うんですかね。なので、そういう意味では、「優しい人たちだな」って。



2

地元への思い、 地元の变化・復興

地元や家族が亡くなった場所は、否応なく震災を思い起こさせる。復興が進めばいいと思う一方で、元の風景とは全く違うものになっていくことや復興の地域格差に複雑な思いを抱く。自分が忘れないことで地域が変わっていくことを受け入れられるとも思う。

地元への思い

もともと地元が好きではなかった。地元の景色が変わって初めて、自分の中に地元への愛着があるのを感じた。

.....

この先、地元に戻って暮らすことはほぼないと思う。地元にいると、無意識に辛いことを思い出してしまうから。

.....

実家に帰れば、お父さんの遺影があるので、そういうときにお線香を上げて当時の思いを思い出して、これからの決意とか、思いを固める。そういうのを、想起する、思い起こす所。

地元の変化・復興

あの町で暮らした者として、地元の復興が少しでも早く進めばいいなと思っている。

.....

ずっと内陸で暮らしてきて、(父は)たまたま沿岸の仕事に行ってて流された。毎年、父親が発見された場所に、3月11日に行くようにしてるんですね。最初、ほんとに更地で何もなかったんですけど。こないだ、工事現場のおっちゃんたちがたむろってて。何て言うんですかね。ちょっとさみしいんですけど、でもどこかこう、「ああ、進んでるんだな」って。行くと共に、ちょっと複雑な気持ちになる。

.....

僕が記憶している母親の実家とか親戚の家っていうのは本当に全部きれいさっぱり変わっているということを考えると、やっぱり復興って何でしょうね、復興してるところもあれば、やっぱりなかなか難しいというのも…。復興してるところとしてないところが結構分かれてるんだなって思って。

行くたびに建物がどんどん増えて、ちょっと複雑な気持ちになるというか。それも、でも、だんだん行くたびにモノが増えてくことが、「いや、すごい良いことだな」って思うようになった。

.....

あんなことがあったのに、こんなすぐ忘れ去られていくんだなって思うのはやっぱりさみしい部分はあったんですけど、今、思うことは、「やっぱりそれじゃ進めない」というふうに思っていて。亡くなった方は大勢いるけど、建物が建ったり、復興が進んだからといって、その人たちを忘れるわけじゃないというふうに思っていて、忘れなかったら、自分たちの中で生き続けているというふうに思うので。やっぱりそういうふうに思えたら、たぶん町が新しくなっていくことを受け入れられるんじゃないのかな。





3 この10年間

変わらないことは、寂しさや後悔。ふとした瞬間に込み上げてくる。一方で、支援への感謝やこの経験が無駄にしないという気持ちもずっとある。

変わったことは、家族のまとまりや家族に対する責任感。震災前より強くなった。時間の経過の中で徐々に気持ちが落ち着いてきた。いなくなったことを受け入れられるようになったり、悲しみを原動力に変えられるようになった。自分の体験を他者に伝えることにも整理がついてきた。

この10年、様々な経験をすることで、自分の体験を活かすことが<故人を生かす>ことだと気づいた。

変わらないこと

ふとしたときに、なんとも言えない寂しさが湧き上がってくるのは、震災直後とあまり変わらない。たとえば、かつての自分と同じような家族連れとすれ違ったとき。友達の家族旅行の話を聞いたとき。なんとなく父親に似た雰囲気の人を見かけたとき。そのようなときに、「ああ、私にはもう父親はいないのだな」と思い、どうしようもない気持ちになってしまう。

.....

あんまりお父さん、正直、家にいなかった。朝早く行って夜遅くに、子ども全員寝た後に帰って来るみたい。仕事、遅くまでやってたんで、あんまりそんなに顔合わせる機会がないっていうわけじゃないんですけど、時間がなかった。そういう中でいろいろ伝えられない、伝えたいこととか、見せたかった、そういうのを見せられなかったっていう思いというか、後悔と言いますか、そういうがあるので、そういう意味で、ふとした瞬間に何となく思い出してしまう。

.....

3月11日が近づくと毎年体調を崩す。

.....

これ(震災の経験)をどう活かしていくかどうかは……。これまでもですけど、この先もずっと、自分の経験を活かして、どう繋いでいっていかってということは、変わらず考えていく。

.....

「恩返しをしたい」って、ずっと思ってた。

.....

感謝の気持ち。ホントにいろんな人に、高校のときは、友達に支えられてるし、進学のときはいろんな企業、団体、母親はいろんな面で支えてくれたし、大学に行ってから、友達だったり、大学の給付金とか、いろいろな人に支えられてるのは、震災以降ずっと続いてたんで、今なお感謝、そういう気持ちはずっと変わらない。

変わったこと

震災当初から、もう会う人会う人に「お前が母さんを支えろよ」って言われた。最初その言葉自体が自分の中であんまりしっくりきてなくて。でも、やっぱり月日を追うごとに、父親がいなくなったっていう事実を自分の中で何となく消化し始めて。家族の中で唯一の男なので、やっぱり自分が支えていかなきゃいけないんだなっていうふうに責任と自覚を持って生きようになったかなあ。何か、そこから自分が逃げたら、家族全員がダメになっちゃうなって。

.....

父親が亡くなって、きょうだいで、まあ、それぞれ皆で家のことを手伝う、あんまりそんなに大きいことじゃなくて、ホントに家庭内のことですけど、皆で協力してひとつの生活を築いていくっていうふうには変わってきた。別にその、震災前でも皆で少しずつはやってたけど、より一層強く、強固になった。

.....

震災直後は、父親の月命日が近づくたびに具合が悪くなったり、震災のニュースに関して非常にデリケートになったりしていた。亡くなった父親のことを思い出し、深夜に突然ボロボロと涙が止まらなくなることも多かった。時間が経つにつれて、そのようなことは減っていった。多少は感情をコントロールできるようになったのだと思う。父親との思い出も家族と懐かしみながら和やかに話せるようになった。

.....

もう帰って来ないのはもう十分分かってるし。この世にはいないっていうのは頭では理解してるんですけど。やっぱりなかなか、ふとしたときに、「いや、実はどこかに」とか。あと、父親が乗ってた車とすれ違うときとかも、「あれっ」ってふいに思ってしまうことが何回もあったので。それがだんだんなくなって、「いや、もういねえわ」って自分でツツこめるようになった。

.....

時間の流れがめちゃくちゃ遅かった。心の時間というか、やっぱり父親が帰って来ないっていうのはどうしても不安だった。そういう時間は長く感じていた。ただ、一方で、時間が経つと、何となく、自分の中でも変化してきた。

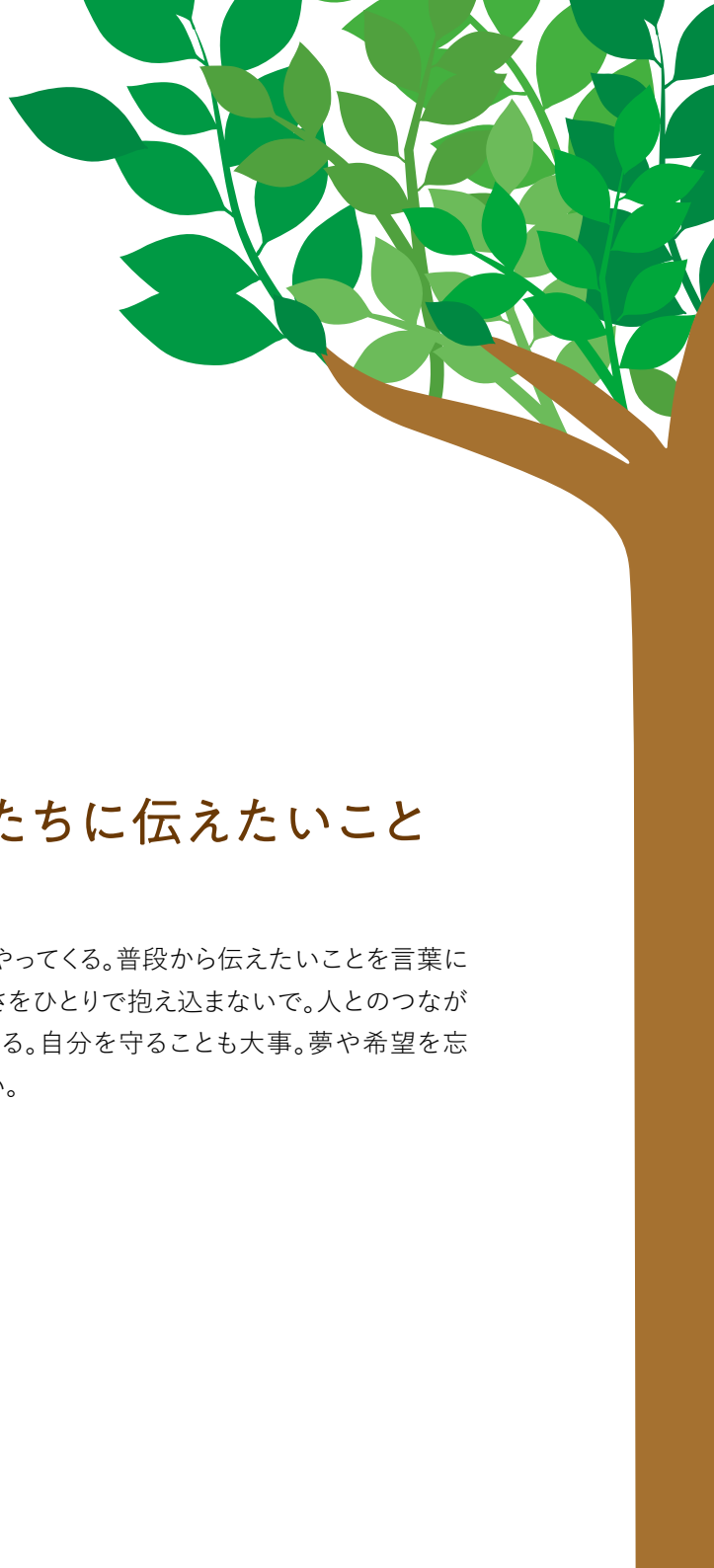
ふとした瞬間に親の顔が出て、やっぱりどうしても忘れると何となく心が嫌だと言いますか…。ただ、まあ、やっぱり、ただ悲しいだけじゃなくて、だからこそ「強く生きるぞ」「負けないぞ」みたいな決意と言いますか、動力源にもなるというような感じですかね。そういう心の持ちようを作っていくっていうのは、10年間で変わった。

高校入学のときはちょっと父親のこと気にしてたけど、高校生活を経て、大学に入学すると、「あんまりそういうの気にすることないんだな」っていうのは、「気にしなくても大丈夫なんじゃない」みたいな感じに心の持ちようは変わってきた。

どうしてもこう、「自分、父親がいないんです」って、やっぱり普通に言えなかった。言えないし、言う必要もない。中学校とか高校の中で普通に暮らしていく分には、自分の家族とかってあんまり意識しない、意識されない。だけど、大学とか、社会に出るってなったら、自分のことを何も知らない人に自分がどういう人かっていうのを言わなきゃいけない。言わないと本当の自分は相手に伝わらないことがすごい多く出てくるなって。どうやって自分を知ってもらえんかって思ったときに、今の自分をつくってる1番の、何ていうんですかね、因子というか、それが父親がいない事実だったっていうふうに感じたので、これを伝えないと、自分を知ってもらえないんだって思ってから、徐々に徐々に…。「えっ、いないんだ」みたいな、負のリアクションを思ってたんですけど、「え、そうなんだ。大変だったね」とか、「だから、そんなにしっかりしてるんだね」とか、何かいろいろ言われたんですけど、「そういうふうに捉えてもらえるんだな」って思ってからですね。

経験を、しっかり自分の中で消化して、で、人に伝えられるようになった。

「いなくなってしまったことを受け入れて、越えていくためにはどうしたらいいか」って考えたときに、1番最初にしっかりきたのが、活かすこと、経験を活かすことだった。どう活かしていくかは、やっぱり人それぞれあると思ってたので、いろんな人の話を聞いて、「ああ、そういうふうに活かし続けるっていう方法もあるんだな」って思いながら試行錯誤してきたな。



4 子どもたちに伝えたいこと

災害は突然やってくる。普段から伝えたいことを言葉にしてほしい。辛さをひとりで抱え込まないで。人とのつながりが支えてくれる。自分を守ることも大事。夢や希望を忘れないでほしい。

普段から伝えたいことを言葉にする

明日の卒業式には父親、「来るぞ」みたいな感じだったんですけど、その前に震災で父親を亡くしてしまった。伝えたいこととかを伝えきれなかったっていうのが悔い。なので、やっぱりいつ誰が、誰と別れるのか分からない状況っていうのは突然起こるものだっていうこと、いつも自分に正直に、気持ちをなるべく前面に出して、伝えたいことはちゃんと言葉で、逃さず人に伝えていくこと、忘れずに、言葉を伝えていくっていうのは心掛けた方がいいと、子どもたちに伝えたい。いつも言葉で感謝なり気持ちなり、自分の伝えたいことを伝えてほしい。

ひとりで抱え込まないで

決してひとりで抱え込まないでほしい

.....

1回、落ちるところまで落ちてしまっても、正直、いいんじゃないかなって思っている。自分、結構落ち込んだので。やっぱ入って落ち込むし、「あー、もうダメだ」って思っちゃうことも多々あると思う。そこはしょうがない。自分がこういう状況だって自分の中で考え続けても、ずっとネガティブな方に行きすぎるともう本当に戻ってこれないと思うんで、自分ひとりで考えないで、誰かに話して自分の状況を整理するっていうのが1番消化は早いんじゃないかな。

.....

あなたたちの心の傷を受け止めてくれる人たちを大切にしてほしい。必ず理解してくれる人たちはいる。

.....

自分を理解してもらうために話すと、自分の中でもさらに自分を理解できるし。で、他人とか人に自分のことを分かってもらえる。

絶対に心は傷つくし、引きずっていくっていうことはたぶん間違いなく起こると思います。ただ、その傷を癒やすのは、時間と、僕の中では人とのつながりでした。人とのつながりを大切にしてください。

.....

心ない言葉や、デリカシーのない質問を投げかけてくる人もいる。今なら無視したり、受け流せたりできることでも、まともに受け止めてしまい、かなり傷つくことが何度もあった。そのような人たちの言葉には絶対耳を傾けないでほしい。そして、その人たちからは離れてください。

夢や希望をもって

夢とか目標とかそういうのを持って日々生き続けることで、やっぱりどこか人生が明るくなると思うし、希望も持って生きられるようになると思うので、そういうふうに自分自身を持っていく、持っていけるように頑張してほしい。





5 これからのこと

震災の経験を語り継いで活かす。震災から得たものを活かしながら生きていくことで、故人の死を無駄にしない。故人とともに生きる。自分が生きていることの意味を考え、自分を活かす(生かす)。夢を実現させたい。

同じような思いをする人たち、子どもたちの支えになれたらと思う。

震災を活かす(故人を生かす、自分を生かす)

私にとっては忘れたい記憶のひとつではありますが、風化させたくないという思いも強くある。震災について語り継いでいけたら良いと思う。

自分の人生に活かさないと、もったいない。今、自分が抱いている感情って(父を)亡くしたから得られたものだっていうふうに思っているので、そういうのを活かしていないと、やっぱり父の死が無駄になってしまうというか、ほんとにただいなくなってしまうだけになってしまう。

自分がその年代の頃の経験なので、(高校生に)いっぱい伝えてあげられたら。たぶん同じような思いを抱きながら毎日生きてきていると思うので。何となく毎日生活して、何となく学校行って、何となく部活やって帰って食べて、本当にメリハリがない生活をしていると思いますので。震災があって、その後に、自分がどう変わったかっていうのを、どこに生きがいを見いだしていくか、きっかけを与えたい。自分が生きてること自体が意味があることだと思う。

ここまで支えてきてくれた人もたくさんいるので、まずは自分のやりたかったこと、夢を諦めずに勧めてくれた皆様のために、自分の夢を実現して、社会に出たい。その人たちの思いを無駄にしないように、社会に出てからも頑張りたい。

誰かのために

私が支えていただいたように、私も誰かの力になればとても嬉しい。

辛い思いをしている子供たちの支えになれば理想。

自分の経験を伝えることで、子どもたちに生きがいを見つけるきっかけを与えたい。

冊子作成にご協力くださいました皆様に感謝申し上げます。



“子どもたち”の声をきく

～東日本大震災からこれまで、そしてこれから～

【編集者】 加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科 教授
震災子ども支援室 室長
一 條 玲 香 震災子ども支援室 研究員
押 野 晶 子 震災子ども支援室 相談員
亀 倉 大 地 震災子ども支援室 相談員
嶺 岸 真 琴 震災子ども支援室 事務員

【発行日】 2021年1月1日

【発行者】 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室

【代表者】 加藤 道代

住 所 仙台市青葉区川内27-1

TEL/FAX 022-795-3263

E-mail s.children@sed.tohoku.ac.jp

震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附を頂いて活動しています。



このパンフレットは環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。